

学力形成に向けた授業づくりの理論と実践 The theory and practice of instructional design

研究代表者 本所 恵 (D1) 教員 田中 耕治
研究分担者 八田 幸恵 (D3) 赤沢 真世 (D3) 徳永 俊太 (D1)
 小見 茂樹 (M2) 趙 卿我 (M1) 細尾 萌子 (M1)

〔研究目的〕

本研究の目的は、理論と実践を融合させて実際の授業改善に寄与する知見を育成することである。そのために、歴史的に授業研究の蓄積を持つ学校をとりあげて、学力形成に向けた授業づくりの理論と実践を検討し、各校での教育実践の進展とそれを支えてきた研究のあり方を探った。

〔研究経過〕

本コロキウム・プロジェクトでは、総合学習に関して歴史的に授業研究の蓄積がある国内の4つの小学校（愛知県知多郡東浦町立緒川小学校、静岡市立安東小学校、和光小学校・和光鶴川小学校、長野県伊那市立伊那小学校）を中心的にとりあげ、そこでの教育実践や研究開発を具体的に検討した。検討に際しては、メンバーで各学校の分担を決め、担当者を中心に各学校の公開研究会へ参加した。これに加えて、隔週水曜4限を使って公開研究会の前後にゼミナールを開き、研究会前には対象校の基盤としている思想やカリキュラム開発の歴史を学習し、研究会後に報告・検討会を行うというスタイルで活動を進めた。

本プロジェクトには、上記の研究分担者に加えて、教育方法学を学ぶ以下6人の研究協力者が参加した。遠藤貴広（研修員）、窪田知子（PD）、松井保樹（M2）、田中容子（M1）、中陽佑（M1）、前橋由紀子（M1）。田中と前橋は現職の高校教員でもあり、学校現場で働く立場からの視点を交えて議論を行った。また、実際に田中が公開した研究授業のビデオ検討会も行った。

〔研究成果〕

総合学習の類型論を下敷きに4つの対象校での総合学習を検討することで、対象校における総合学習の共通項と各々の特徴が浮かび上がった。

オープン・スペースを活用した「個別化・個性化教育」を推進してきた緒川小では、「個性化」として個の学びを充実させるという点が総合学習において重視されており、それが教科学習にも貫かれていた。

「社会科の初志をつらぬく会」発起人の一人である上田薫を研究同人として授業研究をおこなってきた安東小の教育実践では、緒川小と同じように学習を「個性化」という主張が異なる現れ方をしていた。安東小では総合学習よりもむしろ社会科や国語科といった教科において、集団の中で話し合い問答することを通して、一人ひとりの子どもたちが個性的な学びを進めると考えられていた。この考え方から、教科学習の課題の「総合性」が追及されていたといえる。そしてその理念が、「カルテ」や「座席表」を用いて、焦点をあてた具体的な子どもの学習の姿を通して学級全体を見るという授業研究によって支えられていた。

安東小と同様に、子どもの学習の姿を教師が記録し蓄積するという授業研究の方法が、伊那小では総合学習において重視されていた。同校では、総合学習を学習のひとつの形ではなく子どもの学びそのものとして位置づけ、1・2年生では学習時間の全てを「総合学習」にあて、3年生以降も「総合学習」を受け継ぐ「総合活動」が平均で週5～6時間設けていた。そこでは、学級で課題を決定した活動が半年から一年以上にわたって続けられる。この長期にわたって、教師はそれぞれの子どもの学習の姿を記録し、研究協議会は互いに子どもの学びを見る目を育てる場として位置づけられていた。この授業研究のスタイルは、教師が教科の枠組みや予め決められた目標を持って学習を指導することを否定する伊那小のカリキュラム思想と表裏をなすものといえるだろう。

総合学習で取り上げる題材について、緒川小では個人が、伊那小では学級が決定していたが、和光学園では、子どもたちが探究すべき内容を学年順に系統づけて設定している。これは、同校が「総合学習」を領域として子どもたちに保障すべき内容を持つものと考えているためであり、異文化・国際理解教育、性教育、食育といった今日的な課題が取り上げられる。教師はこれらの総合学習の教材研究を中心に授業研究を行っていた。

以上のように、総合学習と教科学習との関連や総合学習の実践について、各校は異なるアプローチをとっていた。それぞれの特徴の背景には、総合学習のみならずカリキュラム全体に対する思想の差異が現れており、それが授業研究の方法論と密接に結びついていた。これらの実践の成果と課題を踏まえてこれからの授業を構想するとともに、実践研究において一つひとつの教育実践を見る際、そして、自らが教育実践に関わる際に、その実践の背後にある歴史と理念、授業研究の方法論にも自覚的であらねばならない。

(文責：本所 恵)